

東アジア児童文学のゆくえ③

—中国児童文学の「高圧線」、そして「五月三十五日」

成實朋子

* 日本児童文学界の「タブーの崩壊」

私の勤務している大学の講座では、毎年十二月に三年生が集まって、ゼミごとに自主研究の成果を発表する。今年はあるゼミの学生たち（成實ゼミではない）が、宮部みゆきの『ブレイブ・ストーリー』（二〇〇三年）を研究対象に取り上げた。発表の具体的な内容は割愛するが、作中人物の死について言及したくだりで、「児童文学界におけるタブーの崩壊」という発言があった。父親は愛人と暮らすために家を出て行き、母親は自殺未遂を起こしてしまうという主人公の設定、主要登場人物が人柱となって死ぬという展開は、「児童文学のタブーが崩壊」した後ならでは、ないのである。

この見解の妥当性についての判断はひとまず脇に置くこととして、発表を聞いていて、「タブーの崩壊」という言葉が久々に聞いたな、と思った。

周知のように、この「タブーの崩壊」という言葉は、一

九七〇年代後半頃から言われ始めたもので、本誌『日本児童文学』も一九七八年五月号で、「タブーの崩壊——性・自殺・家出・離婚」という特集を行っている。同号に掲載された「タブーは破られたか——陰の部分の物語化をめぐって——」と題する文章の冒頭で、本田和子は当時の児童文学界を次のように概括している。

児童文学の世界で、タブーの解禁が話題となっている。確かに、最近の作品の中には、従来あまり扱われなかった題材や手法を、大胆に展開させているものが少なくない。その典型例は、両親の不和・離婚、それに伴って揺れ動く家庭をテーマとし、しかも、必ずしも従来のような形で幸福な結末を約束してはいないという、そんな作品の出現に見ることができよう。

そして、そもそも児童文学にタブーが存在したのか否か